

□ 書 評 □

「胃・腸管運動の基礎と臨床」

広島大学・生理学

銭場 武彦 著

京都府立医大公衆衛生学教室

川 井 啓 市

興味深く、一気に読んだ。全篇を通して読者の理解を深めようとする著者の心遣いが感じられる。すなわち、豊富な文献をもとに、適確な記述のみを取り出し、平易にまとめている。しかも各項目のとり上げ方にも一貫性があり、その内容も簡潔な説明と事実に裏打ちされた理論とでがっちり構成されている。本書はまた消化管運動と自律神経とに関する多くの日本人の研究を紹介しており、この方面のわが国の若い研究者に強い刺激を与えるであろう。それゆえ、自序にみるように、本書が若い研究者を対象としていることは全く的を得たものといえる。

総論では、従来、臨床家にとって難解であった用語や理論の説明に十分意が尽くされている。これも、こ

の方面の第一人者である著者の豊富な知識と深い洞察力によるものである。特に各種の腸反射に関する記述や、消化管運動の調整中枢としての脊髄、脳幹、大脳に関する項目は著者の独壇場である。さらに消化管運動と血行との関係にまで論を展開していることは、著者の今後の研究に読者の興味を向けさせるに十分であろう。

各論では著者の専門的分野である消化管運動の神経系調節に多くの部分がさかれている。なかでも各種の反射を介して、各臓器相互間の運動が促進、抑制を受ける仕組みについては、極めて詳細な実験結果をもとに論じられており、この仕組みの複雑さが浮き彫りにされている。また臨床医の立場からみると、本書にと

り上げられている各種の病態は、多くの要因から成ると考えられるだけに、その解析は消化管運動のみから論じることには勇気を要する。しかし著者はこの点にもあえて積極的な論陣を張っておられ、本書により、臨床医の眼がより一層この方面の研究に注がれるものと期待できる。

最後に、本書には著者のライフワークである消化管運動と自律神経の関係についての研究が随所に盛り込まれているだけに、単なる入門書というよりは、高度な専門書を平易な読物に組み変えた著者の英断に頭が下がる思いがする。

真興交易医書出版部刊

A 5、250頁、図123、表11、5,200円